

日本語版アイデンティティ・スタイル尺度の 妥当性の検討

新見直子・前田健一・加藤佳子

(2005年9月30日受理)

A study of confirming the validity of the Japanese version of the Identity Style Inventory

Naoko Niimi, Kenichi Maeda, and Yoshiko Kato

This study was designed to confirm the validity of the Japanese version of the Identity Style Inventory. The three Identity Style scores (informational, normative, and diffuse/avoidant) were compared among the four groups of Identity Status (Identity Achiever, Moratorium, Foreclosure, and Identity Diffuse) based on the college students' data. Results revealed that the Identity Achiever and the Moratorium groups showed higher informational style score than the other two groups, and that the Identity Diffuse group showed the highest diffuse/avoidant style score of four groups. These results suggested that the Japanese version of the Identity Style Inventory was valid.

Key words: identity style, identity status, validity

キーワード：アイデンティティ・スタイル、アイデンティティ・ステータス、妥当性

問題と目的

アイデンティティ研究の多くは、Marcia (1966) の開発したアイデンティティ・ステータス・パラダイムに基づいて、対象者を4つのアイデンティティ・ステータス（アイデンティティ拡散、早期完了、モラトリアム、アイデンティティ達成）に分類している。これら4つのアイデンティティ・ステータスは、青年のアイデンティティ形成過程と対応するものと想定されていた。すなわち、アイデンティティを形成していないアイデンティティ拡散から、早期完了やモラトリアムを経て、アイデンティティを形成しているアイデンティティ達成に至る上昇的变化しか想定されていなかった。しかし、その後の縦断研究（例えば、Adams & Fitch, 1982; Marcia, 1976）は、アイデンティティ・ステータスの上昇的变化だけでなく、アイデンティティ達成からモラトリアムや早期完了への下降的变化がみられることを明らかにした。

Berzonsky (1989, 1990) は、アイデンティティ形成のプロセス・モデルを提唱し、アイデンティティ形成過程におけるアイデンティティ・ステータスの上昇

的变化と下降的变化の双方を説明している。それによると、アイデンティティ形成過程は、様々な自己領域（社会的自己、道徳的自己など）を統合し、自己構造を再構造化する過程である。自己領域の統合や自己構造の再構造化は、個人が重要な意思決定や問題解決に直面した時、すなわち、アイデンティティを探索しようとする時に必要とされる。新たな自己構造を再構造化しようとしている最中にアイデンティティ・ステータスを分類すると、アイデンティティ達成の者であっても途中のモラトリアムとして分類され、その結果として下降的变化が観察される。新たな意思決定や問題解決に直面するたびに、自己構造の再構造化が繰り返されるので、アイデンティティ・ステータスの上昇的变化と下降的变化が生じると説明される。

Berzonsky (1989, 1990) は、自己構造を再構造化する場合に、情報方略、規範方略、拡散/回避方略のうち、どの方略を典型的に使用するかによって、個人のアイデンティティ・スタイル（情報、規範、拡散/回避）が異なると考えている。この3つのアイデンティティ・スタイルを決定するために Berzonsky (1989) は、Identity Style Inventory (ISI) を開発した。この尺度は、

情報スタイル11項目、規範スタイル9項目、拡散/回避スタイル10項目およびコミットメント10項目の合計40項目から構成されている (Berzonsky, 2004)。

ISIの妥当性については、これまで多様な尺度との関連から検討されている。例えば、Berzonsky (1989)は、3つの下位尺度 (情報スタイル、規範スタイル、拡散/回避スタイル) と locus of control の外的統制、抑制不安、促進不安および権威主義との関連を検討している。その結果、情報スタイルは促進不安と、規範スタイルは権威主義と、拡散/回避スタイルは外的統制や抑制不安とそれぞれ有意な正相関を示した。これらの結果は、ISIとは異なる外的基準との基準関連妥当性を実証するものである。

同じアイデンティティ概念を捉える ISI とアイデンティティ・ステータスとの理論的対応関係を検討した研究としては、Berzonsky & Neimeyer (1994) や Schwartz, Mullis, Waterman, & Dunham (2000) の研究が挙げられる。例えば、Berzonsky & Neimeyer (1994) は、大学生560名を対象に、the Objective Measure of Ego Identity Status (OM-EIS; Adams, Shea, & Fitch, 1979) を使用して4つのアイデンティティ・ステータス群を構成した。3つのスタイル得点について4群間で比較した結果、情報スタイル得点では、アイデンティティ達成群が他の3群よりも、モラトリアム群と早期完了群がアイデンティティ拡散群よりも有意に高かった。規範スタイル得点では、早期完了群が他の3群よりも有意に高かった。拡散/回避スタイル得点では、アイデンティティ拡散群が他の3群よりも有意に高かった。これらの結果は、情報スタイルとモラトリアムの対応を除けば、アイデンティティ・ステータスとアイデンティティ・スタイルが理論的に一定の対応関係にあることを実証するものである。

ところで、新見・前田 (2005) は、ISIの日本語版アイデンティティ・スタイル尺度 (日本語版 ISI) を作成し、その妥当性の検討を試みている。日本語版 ISI では、項目内容の検討、バックトランスレーションおよび確認的因子分析の結果に基づいて、オリジナルの ISI から7項目が削除されている。また、オリジナルのコミットメント下位尺度の10項目は、日本語版では使用されていない。その結果、日本語版 ISI は、情報スタイル9項目、規範スタイル5項目、拡散/回避スタイル9項目の合計23項目から構成された。日本語版 ISI の構成概念妥当性については、確認的因子分析の結果、オリジナルの ISI と同様の3因子を想定できることが確認された ($GFI=.84$, $AGFI=.81$, $RMR=.08$)。また、基準関連妥当性については、locus of control の外的統制、自己充實的達成動機および職業忌避的傾向との関

連を検討している。その結果、情報スタイルは自己充實的達成動機と、規範スタイルは自己充實的達成動機と、拡散/回避スタイルは外的統制や職業忌避的傾向とそれぞれ有意な正相関を示した。拡散/回避スタイルの結果は、Berzonsky (1989) と同様に、アイデンティティ・スタイル尺度の妥当性を実証するものであった。

現在のところ、日本語版 ISI を使用した研究は新見・前田 (2005) のみであり、日本語版 ISI を今後の研究で使用するためには、多様な外的基準との基準関連妥当性や信頼性の検討を重ねる必要がある。特に、日本語版 ISI とアイデンティティ・ステータスとの理論的対応関係については、オリジナルの ISI と同様の関係が認められるか否かを確認しておく必要がある。そこで、本研究では Berzonsky & Neimeyer (1994) や Schwartz, et al. (2000) の研究と同様に、アイデンティティ・ステータス群を構成し、日本語版 ISI の下位尺度得点について4群間比較を行い、日本語版 ISI とアイデンティティ・ステータスとの対応関係を検討する。

日本語版 ISI とアイデンティティ・ステータスとの対応関係を検討する場合の問題点の1つは、OM-EIS (Adams et al., 1979) の日本語版がないことである。日本では調査法を使用してアイデンティティ・ステータスを分類する場合、加藤 (1983) の開発した同一性地位判定尺度がよく使用されている。しかし、この同一性地位判定尺度は次の2点で Berzonsky & Neimeyer (1994) が使用した OM-EIS と異なる。第1は、分類方法が異なっている点である。OM-EIS は、4つのステータス下位尺度 (アイデンティティ拡散、早期完了、モラトリアム、アイデンティティ達成) から構成されている。各尺度の得点は相互独立の量的得点であり、特定の尺度得点が顕著に高い者をそれぞれのアイデンティティ・ステータス群に分類する。それに対して、同一性地位判定尺度 (加藤, 1983) では、現在の自己投入、過去の危機、将来の自己投入の希求の3つの下位尺度を組み合わせるアイデンティティ・ステータス群を質的に分類する。第2は、4つのステータス群に分類される人数比が異なる点である。Berzonsky & Neimeyer (1994) では、4つの典型的なステータス群に分類された人数は、大学生560名のうちアイデンティティ達成群55名 (9.8%)、モラトリアム群28名 (5%)、早期完了群28名 (5%)、アイデンティティ拡散群37名 (6.6%) であり、各群の人数比はほぼ同程度であった。それに対して、同一性地位判定尺度を使用した都筑 (1993) では、同一性達成 (アイデンティティ達成) 群28名 (10%)、積極的モラトリアム (モラトリアム) 群44名 (15.7%)、権威受容 (早期完了) 群7名 (2.5%)、

同一性拡散（アイデンティティ拡散）群23名（8.2%）であり、各群の人数比に偏りがみられる。同一性地位判定尺度では早期完了群の人数比が低いいため、この群の特徴が不明確になる可能性が高い。これらの相違点はあるものの、日本では同一性地位判定尺度を使用した研究が多いので、本研究でも、同一性地位判定尺度（加藤，1983）を使用することにした。

本研究の目的は、日本語版 ISI の妥当性を検討することである。加藤（1983）の同一性地位判定尺度を使用して4つのアイデンティティ・ステイタス群を選出し、アイデンティティ・スタイル尺度得点について群間比較をする。群間比較の結果は、Berzonsky & Neimeyer（1994）と同様に、同一性達成群は情報スタイル得点を、権威受容群は規範スタイル得点を、同一性拡散群は拡散/回避スタイル得点を他の3群よりも高く示すと予想される。

方法

対象者 心理学の授業を受講している2クラスの大卒2、3年生計187名（男性69名，女性118名）を対象に調査を実施した。

実施時期 第1クラスでは、2004年11月に第1回目の調査を実施し、2005年1月に第2回目の調査を実施した。第2クラスでは、2005年5月上旬に第1調査を実施し、下旬に第2調査を実施した。

手続き 調査は、いずれも授業時間の一部（約15分～20分）を使用して集団実施した。第1回目の調査では、同一性地位判定尺度を実施した。第2回目の調査では、アイデンティティ・スタイル尺度を実施した。

測定尺度と得点化

(1) アイデンティティ・スタイル Berzonsky（1997）の ISI (Identity Style Inventory) を邦訳・修正した新見・前田（2005）の日本語版 ISI の3下位尺度計23項目を使用した。表1は、本研究で使用した日本語版 ISI の23項目を下位尺度別（情報スタイル9項目，規範スタイル5項目，拡散/回避スタイル9項目）に示したものである。Berzonsky（1997）と同様に、各項目内容が自分にあてはまると思う程度について5段階（1点：まったくあてはまらない～5点：とてもよくあてはまる）で評定させた。下位尺度間で項目数が異なるので、各下位尺度得点は1項目あたりの平均得点を使用した。したがって、4つの下位尺度得点はいずれも1点から5点までであり、得点が高いほど各下位尺度

表1 日本語版 ISI の確認的因子分析結果

| 項目 | I | II | III |
|--|-----|------|-----|
| I 情報スタイル | | | |
| 1. 人生で何をすべきかについて、真剣に考えることに多くの時間を費やしてきた。 | .43 | | |
| 4. 誰かと議論するときには、相手の立場にたって、その人の視点からも考えようとする。 | .48 | | |
| 10. 自分の納得のいく価値観をもつために、人と討論したり、多くの時間を費やしてきた。 | .41 | | |
| 13. 個人的な問題が生じたとき、理解を深めるために、その状況を細かく検討しようとする。 | .53 | | |
| 14. 何か問題があるとき、専門家(教師, 医師, 弁護士など)に意見を求めることはよいことだと思う。 | .25 | | |
| 18. 自分にとって大事な問題に取り組むことは、しばしば自分にとって重要なきっかけになると思う。 | .64 | | |
| 21. 何か決断しなければならないとき、いくつかの選択肢について時間をかけてよく考えたいと思う。 | .41 | | |
| 23. 人生において自分で考えなければならない事柄については、責任をもって対処したいと思う。 | .68 | | |
| 25. 大事な決断をするときには、その前にできるだけ多くの情報を集めておきたいと思う。 | .60 | | |
| II 規範スタイル | | | |
| 6. 私がいつも人生の目標をもってきたのは、何かに向かって努力するようにとしつけられてきたからだと思う。 | | .24 | |
| 11. 新しい考えを取り入れるよりも、ゆるぎない信念をもっている方がよいと思う。 | | .73 | |
| 16. いろいろな価値について悩むよりも、決まった価値観をもっていた方がよいと思う。 | | .79 | |
| 20. 一度よい問題解決法をみつけたら、その方法を繰り返し使っていく方がよいと思う。 | | .36 | |
| 27. 何か問題が生じたときには、親しい友人や家族・親類の意見に従う方がよいと思う。 | | .18 | |
| III 拡散/回避スタイル | | | |
| 5. 前もってよく悩むようなことはしない。私は、何かが起きてから、決断をする。 | | | .37 |
| 7. 自分にとって大事な問題であっても、たいてい何とかなると思ってほうっておく。 | | | .49 |
| 9. 自分の将来について今は真剣に考えない。それはずっと先の話だと思う。 | | | .45 |
| 12. 何か決断をしなければならないときでも、何かが起こるまで決断を延期しようとする。 | | | .29 |
| 15. 人生についてあまり深刻に考えない方がよいと思う。人生は楽しむものだ。 | | | .47 |
| 17. 私は、様々な問題について考えたり、関わったりすることをできるだけしないようにしている。 | | | .54 |
| 19. 自分のことを自分で考え、自分で対処することを求められる状況避けようとする。 | | | .44 |
| 24. これから起こると思われる問題について考えてもしかたがない。物事はなるようにしかならないと思うからだ。 | | | .63 |
| 26. ある状況で自分にストレスがかかりそうだと感じると、それを避けようとする。 | | | .31 |
| 因子間相関 | | | |
| | I | — | |
| | II | -.12 | — |
| | III | -.70 | .43 |

注：数値は、各因子から各項目へのパス値（標準化推定値）である。

表2 同一性地位判定尺度項目 (加藤, 1983)

| | |
|------------|--|
| 現在の自己投入 | |
| 1. | 私は今、自分の目標を成し遂げるために努力している。 |
| 4. | 私は、自分がどんな人間で何を望み行おうとしているのかを知っている。 |
| 7. | 私には、特に打ち込むものはない。(*) |
| 10. | 私は、「こんなことがしたい」という確かなイメージを持っていない。(*) |
| 過去の危機 | |
| 2. | 私はこれまで、自分について自主的に重大な決断をしたことはない。(*) |
| 5. | 私は、親やまわりの人の期待に沿った生き方をすることに疑問を感じたことはない。(*) |
| 8. | 私は、自分がどんな人間なのか、何をしたいのかということ、かつて真剣に迷い考えたことがある。 |
| 11. | 私は以前、自分のそれまでの生き方に自信が持てなくなったことがある。 |
| 将来の自己投入の希求 | |
| 3. | 私は、一生懸命に打ち込めるものを積極的に探し求めている。 |
| 6. | 私は、自分がどういう人間であり、何をしようとしているのかを、今いくつかの可能な選択を比べながら真剣に考えている。 |
| 9. | 私は、環境に応じて、何をすることになっても特にかまわない。(*) |
| 12. | 私には、自分がこの人生で何か意味のあることができるとは思えない。(*) |

注：(*)は逆転項目を表す。

表3 各アイデンティティ・ステータスの人数

| | 同一性達成 | A-F 中間 | 権威受容 | 積極的モラトリアム | D-M 中間 | 同一性拡散 |
|----|-------|--------|------|-----------|--------|-------|
| 男性 | 7 | 12 | 4 | 6 | 36 | 4 |
| 女性 | 12 | 8 | 2 | 19 | 73 | 4 |
| 全体 | 19 | 20 | 6 | 25 | 109 | 8 |

注：A-F 中間は同一性達成-権威受容中間地位を、D-M 中間は同一性拡散-積極的モラトリアム中間地位をそれぞれ表す。

表4 各下位尺度の平均得点 (SD)

| | 同一性達成 | 権威受容 | 積極的モラトリアム | 同一性拡散 |
|-----------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 情報スタイル | 4.12 (0.47) | 3.57 (0.34) | 3.96 (0.36) | 3.17 (0.55) |
| 規範スタイル | 2.65 (0.51) | 2.87 (0.57) | 2.83 (0.63) | 2.78 (0.47) |
| 拡散/回避スタイル | 2.13 (0.47) | 2.37 (0.55) | 2.21 (0.28) | 3.13 (0.35) |

の傾向が強いことを表す。

なお、23項目が Berzonsky (1997) の想定する3因子から構成されるか否かを検討するため、新見・前田 (2005) と同様に、187名のデータに基づいて、確認的因子分析を行った (表1参照)。その結果、ある程度高い適合度指標が得られた ($GFI=.82$, $AGFI=.78$, $RMR=.07$)。この結果から、日本語版 ISI は、本研究においても、想定された3因子から構成されることが確認されたといえる。

(2) アイデンティティ・ステータス 加藤 (1983) の作成した同一性地位判定尺度の12項目を使用した。表2は、同一性地位判定尺度の12項目を下位尺度別 (現在の自己投入4項目、過去の危機4項目、将来の自己投入の希求4項目) に示したものである。加藤 (1983) と同様に、各項目内容が自分にあてはまると思う程度について6段階 (1点: 全然そうではない, 2点: そうではない, 3点: どちらかといえば、そうではない, 4点: どちらかといえば、そうだ, 5点: かなりそうだ, 6点: まったくそのとおりだ) で評定させた。

アイデンティティ・ステータス群の構成 加藤 (1983) の分類基準を使用して全対象者187名を6つのアイデンティティ・ステータスのいずれかに分類した (表3参照)。その後で、都筑 (1993) と同様に、典型的な4つのアイデンティティ・ステータス群 (同一性達成, 権威受容, 積極的モラトリアム, 同一性拡散) を選出し、群間比較の分析対象者とした。

結果

表4に示す3つのアイデンティティ・スタイル得点別に4群間比較を行った。なお、各アイデンティティ・ステータス群の人数が少ないため、男女のデータを込みにして分析を行うことにした。群間比較の結果、情報スタイル得点では、 $F(3, 57)=9.91, p<.001$ で群の主効果が有意であった。多重比較 (以下の多重比較はすべて Ryan 法を使用し、有意水準はすべて $p<.05$ である) の結果、同一性達成群は権威受容群や同一性拡散群よりも有意に高かった (順に $t=2.62, t=5.10$)。また、

積極的モラトリアム群は同一性拡散群よりも有意に高かった ($t=4.39$)。規範スタイル得点では、4群間に有意差はみられなかった。拡散/回避スタイル得点では、 $F(3, 57) = 12.40, p < .001$ で群の主効果が有意であった。多重比較を行ったところ、同一性拡散群は同一性達成群、積極的モラトリアム群および権威受容群よりも有意に高かった (順に $t=5.79, t=5.52, t=3.42$)。

考 察

本研究の目的は、日本語版 ISI を使用して、アイデンティティ・スタイルとアイデンティティ・ステータスとの対応関係を検討することであった。まず、拡散/回避スタイル得点では、同一性拡散群が他の3群よりも有意に高い得点を示し、Berzonsky & Neimeyer (1994) と一致する結果が得られた。この結果から、日本語版 ISI の拡散/回避スタイル下位尺度は、Berzonsky (1989, 1990) の想定する拡散/回避スタイルの傾向を測定することができるといえる。また、Schwartz et al. (2000) は、2つの対象集団別に分析をしているが、どちらの分析でも本研究と同様に、アイデンティティ拡散群が他の3群よりも有意に高いことを報告している。以上の3つの研究が異なる文化間で一貫した結果を示していることから、拡散/回避スタイルとアイデンティティ拡散の対応関係は強固なものであると示唆される。

次に、情報スタイル得点については、同一性達成群が権威受容 (早期完了) 群や同一性拡散群よりも有意に高い得点を示した。この結果は、Berzonsky & Neimeyer (1994) の結果の一部と対応する。Berzonsky & Neimeyer (1994) では、アイデンティティ達成群が他の3群よりも、モラトリアム群と早期完了群がアイデンティティ拡散群よりも有意に高かった。モラトリアム群を除けば、どちらの研究結果もアイデンティティ達成群 > 早期完了群、アイデンティティ拡散群で一致している。ただし、得点順位は両研究とも、第1位がアイデンティティ達成群、第2位がモラトリアム群、第3位が早期完了群、第4位がアイデンティティ拡散群で一致していた。また、Schwartz et al. (2000) の第1対象集団 (113名) の結果は、本研究と同じ得点順位であったが、有意な群間差は本研究と異なり、アイデンティティ達成群 ≒ モラトリアム群 > 早期完了群 > アイデンティティ拡散群であった。第2対象集団 (196名) の結果も得点順位は本研究や第1対象集団と同一であるが、有意な群間差はアイデンティティ達成群 ≒ モラトリアム群 > 早期完了群 > アイデンティティ拡散群であった。以上4つの研究では、4群の得点順位が一致

していることから、本研究で使用した日本語版 ISI の情報スタイルは、アイデンティティ・ステータスと一定の対応関係があるといえる。

最後に、規範スタイル得点の群間比較では有意な群間差が認められなかった。それに対して、Berzonsky & Neimeyer (1994) では、早期完了群が他の3群よりも有意に高かった。Schwartz et al. (2000) の第1対象集団の結果は、早期完了群とアイデンティティ達成群がアイデンティティ拡散群やモラトリアム群よりも有意に高かった。第2対象集団では、早期完了群が他の3群よりも、アイデンティティ拡散群がモラトリアム群よりも有意に高かった。このように、Berzonsky & Neimeyer (1994) と Schwartz et al. (2000) の結果では、明らかに早期完了群が規範スタイル得点を高く示していた。本研究と Berzonsky & Neimeyer (1994) や Schwartz et al. (2000) の結果に違いがみられた理由として、本研究では権威受容 (早期完了) 群が少ないことが挙げられる。今後、対象者の人数を増やして規範スタイルと早期完了の対応関係について再検討する必要があるだろう。

【引用文献】

- Adams, G. R., & Fitch, S. A. (1982). Ego stage and identity status development: A cross-sequential analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 574-583.
- Adams, G. R., Shea, J., & Fitch, S. A. (1979). Toward the development of an objective assessment of ego-identity status. *Journal of Youth and Adolescence*, 8, 223-237.
- Berzonsky, M. D. (1989). Identity style: Conceptualization and measurement. *Journal of Adolescent Research*, 4, 268-282.
- Berzonsky, M. D. (1990). Self-construction over the life span: A process perspective on identity formation. In G. J. Neimeyer & R. A. Neimeyer (Eds.), *Advances in personal construct theory* (Vol. 1, pp. 155-186). Greenwich, CT: JAI Press.
- Berzonsky, M. D. (2004). Identity style, parental authority, and identity commitment. *Journal of Youth and Adolescence*, 33, 213-220.
- Berzonsky, M. D. (1997). Identity style inventory (ISI3). Unpublished Manuscript State University of New York, Cortland.
- Berzonsky, M. D., & Neimeyer, G. J. (1994). Ego identity status and processing orientation: The moderating role of commitment. *Journal of Research in Personality*, 28, 425-435.

- 加藤 厚 (1983). 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302.
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- Marcia, J. E. (1976). Identity six years after: A follow-up study. *Journal of Youth and Adolescence*, 5, 145-160.
- 新見直子・前田健一 (2005). 大学生のアイデンティティ・スタイルとキャリア発達の基礎スキル 審査
- 中
- Schwartz, S. J., Mullis, R. L., Waterman, A. S., & Dunham, R. M. (2000). Ego identity status, identity style, and personal expressiveness: An empirical investigation of three convergent constructs. *Journal of Adolescent Research*, 15, 504-521.
- 都筑 学 (1993). 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, 41, 40-48.